

# 〈完璧な世界〉への絶望と 〈荒廃〉への希望

人間存在は、いったい何に対して懸命に生きてきたのか

上柿崇英

篠原雅武 著  
▶ 複数性のエコロジー  
人間ならざるものの環境哲学  
12・15刊 四六判308頁 本体2600円  
以文社



本書は、オックスフォード大学のマイケル・モントンによる人文学的環境学について取り上げた書物である。ただしこれは単なる解説本ではない。そこにはモントンの言葉を借りた、著者自身の現代社会への断念、端的には、現代人が抱えた〈完璧な世界〉への絶望という問題が論じられているからである。

まず、モントンの思想について述べる。エコロジクスに触れたことがある者ならば、そこにアルネ・ネスとの共通点を見出すことは容易である。なぜならネスが、エコロジーの核心部分を根源的な世界像の転換——「関係的な世界像」として、自己や事物を捉え直す——に求めたように、モントンもまた、ここで「もの」とは何か、「客」とは何かを問うてきたように、主客二元論を超えたから窺えるモントンの思想は、確かに新たな手がかりの萌芽を感じさせるだろう。だが本書の真に見るべき箇所はやはりその言葉を介して、著者自身が投げかけている問いの方にある。すなわちこの世界の日常に対して、なぜ一部の現代人は絶望するのかという問題に他ならない。

まず本書において、この絶望は常に二つの「原風景」を伴っている。それは静かな郊外、峻格に区分けされた敷地に同形状の団地が整然と立ち並び、いわゆる「ニュータウン」の風景である。なぜ「ニュータウン」なのか。それは「ニュータウン」の離れ出た、あの無謀で、完全に無矛盾の一言性を思わせる光景が、まさにわれわれの想起するこの世界の「内省」に他ならない。確かにわれわれは、この世界を人類の進歩、そして人類の叡智が結果したものだと理解しているかもしれない。だが著者に言わせれば、そうした世界の「内省」に、果たして、救いはあるのだろうか。著者はその手がかりを「荒廃」に求めていく。廃墟、シャッター通り、そして「ニュータウン」の陥穽、精神病院、これらは著者にとって「完璧な世界」の傍らにあって、見放され、無視され、放置されたもの、いわば「放擲」されたもの、あるいは「放擲」された人為的空間としての「荒廃」に他ならない。ここで著者は問う。なぜ現代人は、しばしば「荒廃」に魅せられてしまうのか——と。確かに「荒廃」は、心躍るものではないかもしれない。だが「完璧な世界」に絶望した人間に、徹底的に異物を除去し、逸脱的な事態を抑制していく、この世界の深淵というものが、救いを意味するのである。なぜなら「荒廃」に触れることによって、われわれは「完璧な世界」が決して「完璧」ではないと気づくことを直感し、それによって、この虚構の「完璧さ」から解放されるからに他ならない。頑なな「防衛機構」を脱ぎ捨てたとき、はじめて人間は、この世界の事物の基底にある、人間性なるものを、あるいは「防衛機構」に参加できなかった者たちにとりて、それはある種の「狂気」でさえあるだろう。彼らはそうした人々の無邪気さを見て傷つき、そしてまたもや絶望するものである。

こうした絶望を背負った現代人に、果たして、救いはあるのだろうか。著者はその手がかりを「荒廃」に求めていく。廃墟、シャッター通り、そして「ニュータウン」の陥穽、精神病院、これらは著者にとって「完璧な世界」の傍らにあって、見放され、無視され、放置されたもの、いわば「放擲」されたもの、あるいは「放擲」された人為的空間としての「荒廃」に他ならない。ここで著者は問う。なぜ現代人は、しばしば「荒廃」に魅せられてしまうのか——と。確かに「荒廃」は、心躍るものではないかもしれない。だが「完璧な世界」に絶望した人間に、徹底的に異物を除去し、逸脱的な事態を抑制していく、この世界の深淵というものが、救いを意味するのである。なぜなら「荒廃」に触れることによって、われわれは「完璧な世界」が決して「完璧」ではないと気づくことを直感し、それによって、この虚構の「完璧さ」から解放されるからに他ならない。頑なな「防衛機構」を脱ぎ捨てたとき、はじめて人間は、この世界の事物の基底にある、人間性なるものを、あるいは「防衛機構」に参加できなかった者たちにとりて、それはある種の「狂気」でさえあるだろう。彼らはそうした人々の無邪気さを見て傷つき、そしてまたもや絶望するものである。

こうした絶望を背負った現代人に、果たして、救いはあるのだろうか。著者はその手がかりを「荒廃」に求めていく。廃墟、シャッター通り、そして「ニュータウン」の陥穽、精神病院、これらは著者にとって「完璧な世界」の傍らにあって、見放され、無視され、放置されたもの、いわば「放擲」されたもの、あるいは「放擲」された人為的空間としての「荒廃」に他ならない。ここで著者は問う。なぜ現代人は、しばしば「荒廃」に魅せられてしまうのか——と。確かに「荒廃」は、心躍るものではないかもしれない。だが「完璧な世界」に絶望した人間に、徹底的に異物を除去し、逸脱的な事態を抑制していく、この世界の深淵というものが、救いを意味するのである。なぜなら「荒廃」に触れることによって、われわれは「完璧な世界」が決して「完璧」ではないと気づくことを直感し、それによって、この虚構の「完璧さ」から解放されるからに他ならない。頑なな「防衛機構」を脱ぎ捨てたとき、はじめて人間は、この世界の事物の基底にある、人間性なるものを、あるいは「防衛機構」に参加できなかった者たちにとりて、それはある種の「狂気」でさえあるだろう。彼らはそうした人々の無邪気さを見て傷つき、そしてまたもや絶望するものである。

は、確かに新たな手がかりの萌芽を感じさせるだろう。だが本書の真に見るべき箇所はやはりその言葉を介して、著者自身が投げかけている問いの方にある。すなわちこの世界の日常に対して、なぜ一部の現代人は絶望するのかという問題に他ならない。

まず本書において、この絶望は常に二つの「原風景」を伴っている。それは静かな郊外、峻格に区分けされた敷地に同形状の団地が整然と立ち並び、いわゆる「ニュータウン」の風景である。なぜ「ニュータウン」なのか。それは「ニュータウン」の離れ出た、あの無謀で、完全に無矛盾の一言性を思わせる光景が、まさにわれわれの想起するこの世界の「内省」に他ならない。確かにわれわれは、この世界を人類の進歩、そして人類の叡智が結果したものだと理解しているかもしれない。だが著者に言わせれば、そうした世界の「内省」に、果たして、救いはあるのだろうか。著者はその手がかりを「荒廃」に求めていく。廃墟、シャッター通り、そして「ニュータウン」の陥穽、精神病院、これらは著者にとって「完璧な世界」の傍らにあって、見放され、無視され、放置されたもの、いわば「放擲」されたもの、あるいは「放擲」された人為的空間としての「荒廃」に他ならない。ここで著者は問う。なぜ現代人は、しばしば「荒廃」に魅せられてしまうのか——と。確かに「荒廃」は、心躍るものではないかもしれない。だが「完璧な世界」に絶望した人間に、徹底的に異物を除去し、逸脱的な事態を抑制していく、この世界の深淵というものが、救いを意味するのである。なぜなら「荒廃」に触れることによって、われわれは「完璧な世界」が決して「完璧」ではないと気づくことを直感し、それによって、この虚構の「完璧さ」から解放されるからに他ならない。頑なな「防衛機構」を脱ぎ捨てたとき、はじめて人間は、この世界の事物の基底にある、人間性なるものを、あるいは「防衛機構」に参加できなかった者たちにとりて、それはある種の「狂気」でさえあるだろう。彼らはそうした人々の無邪気さを見て傷つき、そしてまたもや絶望するものである。

ある。確かに「完璧な世界」に絶望した人間に、徹底的に異物を除去し、逸脱的な事態を抑制していく、この世界の深淵というものが、救いを意味するのである。なぜなら「荒廃」に触れることによって、われわれは「完璧な世界」が決して「完璧」ではないと気づくことを直感し、それによって、この虚構の「完璧さ」から解放されるからに他ならない。頑なな「防衛機構」を脱ぎ捨てたとき、はじめて人間は、この世界の事物の基底にある、人間性なるものを、あるいは「防衛機構」に参加できなかった者たちにとりて、それはある種の「狂気」でさえあるだろう。彼らはそうした人々の無邪気さを見て傷つき、そしてまたもや絶望するものである。

(環境哲学・現代人間学)